

Title	50年目の大学評価
Sub Title	An evaluation of university in Japan over the last 50 years
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1996
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.89, No.1 (1996. 4) ,p.1- 13
JaLC DOI	10.14991/001.19960401-0001
Abstract	
Notes	会長講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

会 長 講 演

50年目の大学評価

白 井 厚

1. 歴史的評価の重要性

近年は欧米からの影響もあって大学の自己点検・自己評価の必要性が言われるようになり、各大学、関係機関、特に大学審議会や大学規準協会などで、評価の動きが活発になってきた。評価の規準も、教育内容、研究水準、施設、学生の質、環境、経営能力、職員と補助スタッフの質、財力、大学の目的とその遂行プログラム、開放度、国際交流度、出版活動、社会的貢献、広報活動、卒業生の質など、多方面の要素が考えられている。

しかしこれだけではなく、評価の方法としては、長い時間軸をとって考察することも非常に重要ではないだろうか。数十年経ってから母校の有り難みがわかるとはよく聞くことであり、在校時の感覚よりは、多年の経験を経たのちに、大学の教育は自分に何をもたらしたのか、真の人間教育を行い人生の正しい指針を与え得たか、学問に対する関心を生涯にわたって培う教育であったか、教師の講義内容や学問に対する態度は長く尊敬するに値するものであったか、クラスやゼミやサークルは末長く切磋琢磨する良友を得る場であったか、などと考察すると、長い年月で考えた方が遙かに意味があることが多い。卒業後数十年を経た後の評価こそ真の大学評価、ということもできるであろう。

また、大学生活を送った受益者としての個人の主観的な評価ではなく、ある大学の存在の社会における客観的な評価を試みることも重要だが、その時も、同一時点における評価と、数十年を経たのちの評価を考える必要がある。

長い期間を考えた場合、重要な問題は、ある大学の教育・研究の内容が、どこまで歴史の検証に耐えるものか、ということである。無論大学は多数の教師・研究者を擁しているのだから、そして思想・研究の自由を保証すべき機関なのだから、研究内容の責任は個々の研究者が負うべき場合が多いが、大学の目的、目的遂行のプログラム、教育カリキュラム、その大学を代表するような教員の思想や行動や業績、大学全体の雰囲気や知的環境、教員の研究条件や自由度などは、そして社会全体に対する大学の指導性、先見性、影響力などは、大学全体として問われることである。

ことに社会が大変動に巻き込まれ、学生たちが犠牲となるような場合には、大学は政界の外にあるとはいえ、「見張り役」の使命を十分果たしたか、その変動に対してどのような態度をとったのかは、厳しく検討されるべき問題であろう。そして大学の学長や個々の教師・研究者は、その時学生に対し何を問いかけ何を教えたのか、それは教員評価の窮極にある規準である。大学の教師はタレントではないから、講義がわかりやすいとか発音が明瞭だとかいうようなことは、枝葉末節に過ぎない。

2. 大学と戦争協力

“社会の大変動に巻き込まれ学生たちが犠牲になる”最大の実例は、日本では言うまでもなく半世紀前のアジア・太平洋戦争である。この時の死者は、日本人300万人、アジア人3000万人以上と言われている。昨年8月15日における村山前首相の談話（閣議了解）によれば、この戦争は“国策の誤り”であり、“植民地支配と侵略”は“疑うべくもない歴史的事実”であり、“独断的なナショナリズムを排し”、“心からお詫び”せねばならぬものであった。これは、“わが国の行為を厳しく反省（海部元首相）”、“反省と遺憾の意”（宮沢元首相）という談話を一歩進めたもので、さして奇異でもなく、国の内外で好意的に受け取られたようである。同じ日土井たか子衆議院議長は、“斃れた人びとの無念と苦痛、遺された人びとの深い傷痕——これらを思い、私は今肅然として立つのみです。……私たちは、アジアに対する植民地支配と侵略による人権侵害、差別と蔑視の歴史を、今なお清算できず、アジアの人びとの和解を手にしえていないのです。”と述べた（全国戦没者追悼式にて）。

そうなると、次の問いが出てくる。

一体国策を誤らせたのは誰か？

植民地支配と侵略を進めたのは誰か？

真理を求めるはずの大学が、なぜ誤った国策に全面的に協力したのか？

国策を誤らせ、植民地を支配し、侵略を行った人間は責任を取ったのか？

なぜ半世紀もたって、やっと誤りを認めるのか？

大学は、誤った国策に無批判に従ったことについてどのような責任をとったのか？

また今日明らかになったように、大日本帝国陸海軍（皇軍）は、訓練の激しさにおいては世界有数のものであったが、日本の軍国主義化、国粹主義化、帝国主義的侵略、植民地支配に大きな責任があり、三光作戦や南京大虐殺や七三一部隊や従軍慰安婦や強制労働などに象徴される残虐行為、張作霖爆殺事件、柳条湖事件、盧溝橋事件などの謀略、大本営発表に象徴される虚偽、特別攻撃隊に象徴される人権無視と精神主義など、ナチスの軍隊と並ぶ近代最悪の軍隊であった。優秀な軍人がいなかったわけではないが、半封建的な隷属関係と前近代的な神がかりにもとづく集団で、私的制裁の横行、陸海軍の軋轢、他民族蔑視、補給を無視した現地調達主義、略奪容認、国際法無視、

戦史を学ばず近代戦に対する認識も不足、武器と戦術の古さ、海軍の大艦巨砲主義、低い技術水準、情報収集と分析力の弱さなど、近代的な軍隊としてはあまりにも欠点が多い。軍の指導者たちは歴史を学ばず、世界の大勢を知らず、経済力の分析も斥け、神がかりの天佑神助と大和魂に頼り、道徳水準は極めて低く、軍の中央部は出先の暴走も止められなかった。大学の卒業生や「学徒出陣」の学生たちはこのような軍隊に入ることを名誉と教えられ、“目的自体が否定されるに至った軍事行動へ直接参加”⁽¹⁾し、“自爆戦争”の中で多数の戦死者を出したのだが、大学はこのような軍隊とどのような関係を持っていたのか、戦争目的や軍隊に対する批判は全くなかったのか、「戦争と大学」を考える時、これも一つの重要な論点である。

3. 戦時中の『三田新聞』

戦時中の大学の情況を知る基本的な文献は、各大学の大学史で、これを、学内の一次資料、各種の雑誌や紀要、年鑑、学部や図書館や研究所の歴史、パンフレット類、戦後に書かれた回想録や談話などで補う必要がある。大学内の動きは、大きな事件にならないと一般の新聞雑誌で取り上げられる例は少い。こうした中でかなり重要な役割を果たすのが大学新聞で、記事の正確度に多少問題はあっても、速報性や、学生の動きや意見を伝えるメディアとして重要である。大学新聞は、学生がつくるもの、教師や学校側が監督・補助するもの、左翼的なもの、右翼的なものなどいろいろあり、左翼的だったものが弾圧されて戦争協力に変わったものが多い。戦争末期には、学生数の減少、用紙不足、資金不足、勤労働員、空襲などでいずれも発行は困難になり休刊するが、休刊までは学内の状況を報道するほとんど唯一のメディアであった。

大学新聞としては、「東洋創始」を誇る『三田新聞』が一番古く、ロシア革命の1917年（大正6年）発刊、ついで『帝国大学新聞』（東大、1920年）、『日本大学新聞』（1921年）、『早稲田大学新聞』（明治大学新聞）（1922年）、『関西学院大学新聞』『一橋時報』（後に『一橋新聞』、1923年）、『法政大学新聞』（1928年）、『中央大学新聞』（1929年）、『神戸経済大学新聞』（1930年）、『文理科大学新聞』（1931年）と続く。『三田新聞』は高い水準を維持し、1971年（1310号）までの分は、縮刷版（「記事・執筆者索引を含む」）が不二出版から出ており、利用することができる。そのうち戦時中の号について見ると、月に2～4回のペースで発売され（10日と25日発行が多い）、1944年5月10日まで発行されている。ただし戦時中の事とて紙質も悪く、紛失や焼失のため、1942年1月～敗戦までの縮刷版（第7巻）においては15号分が欠号のままであった。しかるに1995年末に、「太平洋戦争と慶応義塾」という共同研究を行っている私のゼミナールの呼びかけに⁽²⁾応じて、幸いにも戦中発行部分が

（1） 白井厚「悲しき史実、悲惨な体験」、『三田評論』1993年、8-9月号。

（2） 白井研究会の共同研究については、拙稿「共同研究『太平洋戦争と慶応義塾』をめぐる」、白井厚・堯子著『オクスフォードから』（日本経済評論社、1995）所収。

大量に図書館に寄贈されたため、欠けていた9号分が補充され、未発見の号は6号分のみとなった。特に1943年、44年という重大な期間の号がほとんど揃ったことは、『三田新聞』の資料的価値を大いに高めた。

この時期の発行状況と補充状況は次のごとくである。

号	日付	トップ記事, トップ論文, 特集
517	43. 1. 1	捷春特集 特集：西洋の包容
518	欠	
519	欠	
号外	1.27	労働力の人格性と国家性（土屋 清）
520	2.10	産業行政統一化と重点生産（今村武雄）
521	2.25	勤労根本法の本質（森戸辰男）
※522	3.10	江戸時代労働者群の性格—我が国賃金労働者の発生—（野村兼太郎） 特集：農工商政策を貫く基本問題
※523	3.25	義務教育の実質的向上, 学事振興資金に百万円
※524	4.10	実践的精神力の活用—日本経済の個性と五重点産業—（金子鷹之助）
525	4.25	転換期に於ける法律社会学研究の必要（峯村光郎） 特集：世界危機の核心 特集：読書
526	5.10	財政学研究の出发点（高木寿一） 昭和17年度三田新聞総索引
527	5.25	価格統制の転換と課題（山城 章） 特集：近代文学に於けるインテリの創造精神 特集：南の医学 特集：南方経済の分析
※528	6.10	現下・戦争法の実体（前原光雄） 特集：日本美学生成の理念
529	6.25	経済秩序維持法への要望（常盤敏太） 特集：現下中立国の動向
530	7.10	原単位計算の意義（小高泰雄） 特集：義塾戦時模様
531	7.25	労働科学と民族科学（後藤 清）
※532	8.10	統制経済と戦争経済（高田保馬）
533	9.10	義塾, 画期的学事改革 特集：塾生夏の成果
※534	9.25	此の日あるのみ, 卒業式告示（小泉信三）
※535	10.25	決戦下・学事振興への巨弾, 義塾研究陣の福音, 第一回学事振興資金発動さる 特集：全慶応文筆コンクール入選作品発表 特集：軍人援護と義塾
※536	11.10	「学徒出陣」特集 出陣特集：軍陣医学 出陣特集：大東亜の言語事情
※537	11.25	大学, 完成への課題—法文系大学とその学問（加田哲二） 出陣特集：戦陣に学徒は如何なる書を携行すべきか
538	12.10	戦場につづく塾生の分列行進, 大詔奉戴日の行事
539	44. 1. 1	東亜共栄圏随筆特集
540	1.10	医専農専を新設, 此の四月より授業を開始 特集：勝利への布陣
541	1.25	塾務の緊急処理を期し, 非常措置委員会を設置
542	2.10	大学高専の整理統合の結果 高等部募集停止に決す
543	2.25	学徒精兵主義へ邁進, 軍事教育の決戦体制強化 特集：明治精神の光芒 特集：勤労出動の反省
544	3.10	決戦政治の新段階—国政運営と国民の熱意（塚本寿一） 特集：義塾案内
545	4.10	最後の文学書—その後の出版界に—（福原麟太郎） 特集：義塾にのぞむ
546	5.10	徳富蘇峯氏の福沢先生評論に就いて（小泉信三）

※印は縮刷版では欠号で新たに補充されたもの

（かなづかいはいは原文のまま。漢字は略字に変えた）

前表のように、一面トップは総合雑誌のように塾教授や著名な学者を動員し、2面にニュースを載せることが多いが、学術論文や書評のほか、別の面では詩やエッセイや絵画など文芸誌的傾向が強いのも一つの特徴である。2ページもしくは4ページ立てで、時に6ページのこともあった。論文の中には、徳富蘇峯の福沢批判に対する小泉塾長の反論（戦中最後の号）や、丸山真男の「福沢に於ける秩序と人間」（1943年11月25日号）のような重要な文章が含まれている。前者は福沢の西欧崇拜と個人主義を非難した徳富の「蘇翁漫談」（『言論報国』）に対し福沢の国権皇張論を説いたものであり、後者は国家主義者福沢を強調する当時の風潮に対して“福沢は……個人主義者たることに於てまさに国家主義者だった”と説く。（丸山真男『戦中と戦後の間 1936—1957』（みすず書房、1976）所収、pp. 143—6）。

もちろん誤記や誤報はあるが、紙面づくりの水準は高いし、『百年史』や従来の年表には記載がない記事や『全集』に含まれていない小泉信三の文章も多く、戦時中の慶大の状況を知るための貴重な資料である。「学徒出陣」特集号など、三田新聞学会の学生たちがほとんど徴兵されるにもかかわらず大量の原稿を集めた充実した内容なので、総動員体制の下で学校側がかなり協力したのではないかと考えられる。⁽³⁾ そうならば「御用新聞」に近いが、それだけに大戦争の渦中에서도記事の正確さはあまり失われていないといえよう。

『三田新聞』を参考にして作成した年表を次に掲げる。

年	年	戦 争 と 慶 應 義 塾	
1925	大14	4 月	治安維持法公布 陸軍現役将校学校配属令公布
		7 月11日	大学、普通部、商工学校に配属将校
		9 月30日	予科、高等部に配属将校
1931	昭 6	7 月 1 日	文部省に学生思想問題調査委員会
1933	8	11月21日	小泉、塾長に就任
1934	9	6 月	文部省に思想局設置
			予科新生に断髪令 大ストライキとなる
1937	12	4 月	教練服制定
		8 月	防護団結成、小泉塾長が団長となる
		10月	出征軍人慰問会組織
		10月 5 日	小泉『忠烈なる我が将兵——慶応義塾学生諸君に告ぐ』（学生に配布）
		12月18日	大学・高等部で南京陥落祝賀式、皇居と靖国神社参拝
		12月	文部省に教学局設置、小泉塾長参与（勅任官待遇）となる
1938	13	12月	小泉『支那事変と日清戦争』（慶応出版）
		2 月 3 日	天皇・皇后の御真影と教育勅語謄本下賜、奉戴式挙行（奉安所は塾監局 3 階北側）
		4 月	文部省教学局の思想統制に対応し、文学部に「明治文化史」開講
		11月 1 日	大学・高等部で漢口陥落祝捷記念式 この年あたりから塾内の服装検査が厳重になる

（3） 1996年2月6日に白井研究会が行ったシンポジウム「戦時中の『三田新聞』をめぐる」における戦時中に学生であった人々の意見による。

		学生狩り
		小泉『時局と思想』（神戸市経済局）
1939	昭14	1月 小泉「時局と経済学」（『三田評論』）
		4月 大学学部で教練が必修科目となる
		9月1日 「興亜奉公日」の行事を行う（41年12月まで毎月1日に行った）
		10月 小泉『学府と学風』（慶応出版社）
		12月 小泉『大学生生活』（岩波書店）
1940	15	1月 小泉『塾の徽章』（『三田評論』、『三田新聞』、小冊子として学生に配布）
		10月11日 「塾長訓示」およびその「註解」を大学評議会で承認
		10月14日 小泉、塾生の「居住心得」を訓示、全塾生に携帯させる
		10月28日 「慶応義塾大学及高等部服装規程」を公示。マフラー、変りズボン使用禁止
		10月30日 教育勅語頒布五十年記念式挙行
		10月 全学生生徒に「時局に際しての学生の本分」を7回講演、塾生道徳化運動
		11月10日 紀元二千六百年奉祝式挙行
		12月1日 大学および高等部学生服装規程制定（制服、制帽、靴はすべて黒、外套は黒、濃紺または濃鼠色、えり巻やスプリングコートの着用禁止）
1941	16	1月10日 新塾歌制定
		4月1日 海軍造兵中将谷村豊太郎、藤原工業大学工学部長に就任
		6月13日 「国防学」開講、伊藤正徳講師
		7月 学生課を拡大強化し学生局とする
		9月15日 日吉の競技場で報国隊結成式、小泉は隊長となって元住吉まで行軍 9月17日より軍関係工場に出場
		12月8日 小泉、三田と日吉で学生を集めて塾長訓示
		12月9日 緒戦祝捷戦勝祈願大行進
		12月15日 小泉『学生に与ふ』（三田文学出版部）
		12月26日 繰上げ卒業式
1942	17	1月12日 報国隊週番制実施
		2月18日 シンガポール陥落祝賀会、祝賀行進
		6月 三田新聞創立25周年記念事業の一つとして戦没塾員讃歌発表、作詩戸沼、作曲早坂
		10月 語学研究所設置、欧米語だけでなく東亜の諸言語研究と教育を目的に
		10月22日 小泉長男信吉戦死
		10月30日 学制頒布七十周年記念式および教育勅語奉読式
		10月下旬 報国団結成、小泉団長となる
		12月8日 大東亜戦争一周年記念行事
		12月21日 山本五十六連合艦隊司令長官から長男戦死を悼む手紙
		12月30日 小泉宅に嶋田海軍大臣弔問
1943	18	1月 小泉、大学院問題で文部省に見解表明
		2月11日 小泉、紀元節式典で塾生は先ず強き軍人たれと訓示
		3月18日 藤原銀次郎、内閣顧問に就任
		3月25日 小泉「新入生諸君へ」（『三田新聞』）
		4月5日 全塾生に断髪令布告 8日実施
		4月6日 東京六大学野球連盟、文部省より解散を命じられる（小泉は抗議をしていたが不成功）

1944 昭19

- 4月8日 小泉、大詔奉戴日式典で大学の価値は出身者が真の愛国者、国家防衛者になることと訓示 この日から全塾生断髪、新予科生から禁酒禁煙
- 4月 予科の教練時間を週2時間から3時間に増加
- 5月22日 青少年学徒に賜りたる勅語奉読式
- 6月5日 三田、日吉、四谷で山本五十六連合艦隊司令長官の国葬送葬式
- 6月12日 軍事特別研究会に塾生70名選ばれ毎週末研究会
- 6月26日 小泉「決戦下の学徒に与ふ」(『毎日新聞』)
- 7月 国策に添って慶応義塾亜細亜研究所開設、小泉所長となる。10月より『亜細亜研究』発刊 10月に研究生室開設
- 7月 三田のキャンパス中庭で防空壕掘り
- 8月 上旬は修練を行う
- 8月 大学院制度特別研究生として文1名(西垣堯安)、経2名(鈴木諒一、中鉢正美)、法1名(中村菊男)、医10名(坂口光洋など)
- 9月 「国防論」、伊藤正徳のほかに武村忠雄も担当
- 9月6日 日吉で学鷲(陸軍操縦、海軍飛行予備学生)歓送会
- 10月 予科生禁煙
- 10月2日 在学徴集延期臨時特例公布、学生の徴兵猶予停止となる
- 10月8日 軍人援護講演会
- 10月10日 小泉「記憶せよ、塾祖の軍人援護」(『三田新聞』)
- 10月16日 出陣学徒壮行早慶野球戦
- 10月21日 神宮外苑競技場で文部省主催出陣学徒壮行会
- 11月10日 『三田新聞』「出陣」特集
- 11月10日 小泉「征け諸君」(『三田新聞』)
- 11月17日 塾生出陣壮行音楽会、「塾生出陣壮行の歌」「塾生壮行会の歌」発表
- 11月18日 医学部戦没軍医追悼会
- 11月19日 日吉で全予科生を集めて出陣学生500名の壮行会 続いて体育祭
- 11月20日 義塾関係戦歿者合同慰霊祭
- 11月23日 塾生出陣壮行会 3千余人の「出陣」学生に小泉訓示 のち福沢の墓へ
- 12月1日 学徒兵入営(陸軍)
- 12月10日 学徒兵入団(海軍)
- 1月18日 評議員会、非常措置委員会設置決定
- 1月 名誉教授制設定、川合貞一就任
- 1月25日 亜細亜研究所研究生34名決定
- 3月9日 特設防護団を改組し宿直についての非常処置を規程
- 3月10日 海軍軍令部第3部が日吉の校舎に入り、以後地下壕掘削開始
- 3月31日 高橋誠一郎ら17教授退職、名誉教授に
- 4月 商工学校、商業学校の生徒募集を停止し工業学校を開設
臨床医の短期養成のため大学付属医学専門学校開設
獣医畜産専門学校開設
- 5月10日 『三田新聞』戦中の最終号発行
- 8月1日 幼稚舎を海軍技術研究所に貸与
- 8月2日 飛行予備学生入隊者壮行式
- 8月5日 藤原工業大学の寄付により工学部増設

1945	昭20	8月25日	幼稚舎生、伊豆修善寺町へ疎開 夏頃から重要な資料や図書を山梨県、新潟県、長野県などに疎開
		9月29日	連合艦隊司令部日吉へ移動
		10月	小泉「決心第一、智術第二」(『現代』)
		10月28日	小泉、小磯内閣の内閣顧問となる
		12月16日	在郷軍人慶応義塾分会発会式
		12月23日	この日限りで授業停止 小泉『戦争と道義』(私家版)
		4月	医学専門部に医師短期養成機関付設 産婆養成所を廃し、医学部付属看護婦産婆養成所をつくる
		15日	日吉地区戦災、工学部焼失
		4月29日	小泉「戦勝と道義精神」(『週刊朝日』)
		5月1日	海軍艦政本部の要請により工学部機械工学科の工作機械、器具、工具などを海軍に貸与
		5月10日	小泉「徳富蘇峯氏の福沢先生評論に就いて」(『三田評論』)
		5月24日	空襲により医学部施設の6割焼失
		5月25日	空襲により三田地区施設の5割以上焼失
		7月1日	小泉、大火傷 戦時教育令などにより学徒隊規定制定
		8月15日	敗戦
		9月8日	アメリカ占領軍、日本の施設を接收
		9月23日	三田の31番教室で形ばかりの卒業式、卒業証書がないので引換券発行
		9月	高等部廃止
		12月1日	小泉退院し、「塾生諸君に告ぐ」を塾内に告示
		10月1日	獣医畜産専門学校、川崎市蟹ヶ谷へ
		10月8日	工学部、目黒区三田へ
		10月	医学部・工学部予科、法学部予科1年、登戸仮校舎へ 文・経・法学部(1年を除く)予科、三田で授業再開
		11月18日	戦後初の早慶野球試合 外地からの引揚者転入学始め アメリカ占領軍により三田第一校舎の一部接收
1946	21	1月1日	『三田文学』復刊
		2月	図書館書庫の屋根改修
		3月13日	アメリカ占領軍接收中の日吉赤屋根食堂焼失
		3月	垂細重研究所廃止
		4月	大学が男女共学制になる
		4月5日	小泉塾長重任、高橋誠一郎塾長代理となる
		5月15日	学生生活協同組合誕生
		5月25日	『三田新聞』復刊
		5月29日	工学部、溝ノ口仮校舎へ移転
		6月3日	文科系予科、三ノ橋仮校舎へ移転
		6月中旬	大学学部教員適格審査委員会
		7月1日	『三田学会雑誌』復刊
		10月	総司令部の勧告により新聞研究所設立、『慶応ジャーナル』創刊

4. 小泉塾長と戦争

大学の最高責任者は学長（総長）であり、特に非常時にはその指導性が問われるところだが、戦時中の諸大学学長の間で最も指導力を発揮し教育者としても大きな影響を与えたのは、慶大の小泉信三塾長だったと言っても過言ではなかろう。小泉は塾祖福沢諭吉を知る慶応義塾の出身者であり、父小泉信吉も塾長経験者であり、学生時代はテニスの名選手であり、慶大を代表する経済学者であり、しかも堂々たる体躯の美丈夫であった。福沢の書に親しんで自由主義者となり、福田徳三らから経済学を学んでイギリス古典経済学を専攻し、また長い間社会思想の講座を担当してマルクス主義批判者としても名声を得た。しかも野坂参三や野呂栄太郎ら共産党員にも目をかけていたことは、別に記したところである。⁽⁴⁾

理想的な家庭を持ち、1933年に45歳の若さで塾長に選ばれた時には、輝くホープとして迎えられ、3期12年にわたって塾長の職にあり、空襲で自宅が焼かれた折は大火傷を負ったが、戦後塾長を退任したあとも、マルクス主義批判者、勇気と良識を持つ保守主義者として、多数の書を書き、日本の社会に大きな影響を与え続けた。東宮参与として現天皇の教育に当り、美智子妃との結婚にも役割を果たしたことなど、人の知るところであろう。

小泉の塾長時代の12年あまりは、満州事変から敗戦に至る日本の“誤った国策”“侵略とその結果としての大きな被害”の時代にはば一致し、大学にとっても最も苦難の時代であった。その中で小泉は、

“機をつかんで講演をなし、文章を書いては、小冊子とし、これらを広く学生に頒布した。目指すところは、学生の志気を鼓舞することであり、塾生としての高い衿持を力強く勧めるものであった。……大学総長の中にあって、文字通り学生の陣頭に立ったことは、異色の存在ではなかったろうか。”⁽⁵⁾

塾長に就任して以来の学生への教訓などを簡略に列挙すると次のようになる。

1934年4月 日吉の新校舎に予科1年生を迎え、全員に丸刈りを命じた（小泉断髪令）。

“これは大変な騒動となって、一部でストライキにまで発展した。毎日、昼休みには屋上に集合して、アジ演説をやる学生など、日吉は騒然となった。”⁽⁶⁾

1937年10月5日 『忠烈なる我が将兵——慶応義塾々生諸君に告ぐ——』

日中戦争（日支事変）開始後100日が過ぎ、日本軍の戦闘を讃美した小冊子。“矢は既に弦を離

(4) 白井厚「慶応義塾大学における社会思想研究と太平洋戦争」、『社会思想史研究』（社会思想史学会年報）No. 19, 1995.

(5) 横智雄「塾長時代の一面」、『三田評論』1966年8-9月号（小泉信三追悼特集），p. 35.

(6) 岡野喜一郎「断髪令と帽子事件」、『小泉信三全集』12, 「月報」5, 1967, p. 3.

れ”“一切の思議、一切の言説は今においては悉く無効”“徹底的戦勝”など、後年小泉が繰り返した言が既に現れ、“戦局拡大して国家が諸君を戦場に要するの日至らば直ちに起つて飛丸の下に進み、諸君の忠烈決して今の将兵の忠烈に遜らざるべき……”と「学徒出陣」を予想し期待するかの如き文章である。

1940年10月11日 「塾長訓示」

- 一、心志を剛強にし容儀を端正にせよ
- 一、師友に対し礼あれ
- 一、教室の神聖と校庭の清浄を護れ
- 一、途に老幼婦女に遜れ
- 善を行ふに勇なれ

「塾の徽章」の要点をとった心得で、その「註解」と共に大学評議会承認。

1941年12月8日 開戦について塾長訓示

“詔勅を拝してから的小泉は、それまでの沈痛な気持ちが一掃され、戦うからには勝たねばならぬという覚悟を新たにし、学生たちにもこれを説いた。「雲破れて天日を仰ぐの感、大詔を拝して、ただ晴れ晴れしい」というのがその時の言葉であった。”今村武雄『小泉信三伝』（小泉信三先生伝記編纂会、1983）、p. 316.

1941年12月15日 『学生に与ふ』

既刊の著からの再録が多いが、開戦とほぼ同時に出版され、小泉の姿勢と学生への期待を示している。「忠烈なる我が将兵」「我等死者を忘れず」など戦時色が強く、また「塾の徽章」は国旗への尊厳から説き塾の名誉、服装や礼儀作法を説く。「道德化運動」の基本となった講演の記録で、塾歌もこの影響下にある。

1941年12月26日 卒業式式辞

“……今日は、即ち香港陥落の捷報の新聞によって伝えられた朝である。……今を去る八十年、即ち文久二年の春に、（福沢）先生は……香港に寄港した。そうしてここで、支那人に対する英人圧制の状を見て、慨然として腕を扼し、いつかは彼れにとって代るべしとひそかに心に約した。……今日の吾々もまた今日先生をしてこの捷報をきかしめばの嘆なきを得ないのである。”『小泉信三全集』26, pp. 161-2.

1943年 2月11日 紀元節式辞

“修文練武、先ず強き軍人たれ”と訓辞（『三田新聞』）

1943年 3月25日 『三田新聞』

私は塾生に対して『塾生生活の道德化及び肉体的精神的武装の準備』を提唱し、文と武とは二つの別のものではない……ことを二三年以前から繰返し力説した。……諸君は学問が本務であるという口実を以て明日の軍人たるに必要な強度の訓練をズルケることは許されない。”「新入

生諸君へ」

1943年4月8日 大詔奉戴日

“諸君はよく死生の問題をお考えになる必要があると思う。諸君は良く死ぬことによって良く生きるのであるが併し良く生きることによって良く死ぬことが出来るのであります”。(塾長訓話、『三田新聞』)

1943年6月26日『毎日新聞』

“学業を名として危険を避けるどころか、前線に出たい心を押えて学窓に学ぶ諸君の心はわれわれ教育者の立場にあるものが身近に諒解している。……殊にわれわれを感動させるものは学園にもたらされる先輩知人の死の報知が、諸君を萎縮させるところか却ってますます諸君を奮起させ、一兵士たらんことを冀うものがますます増加しつつあるという事実である。これは諸君がいまや死生観も形而上学的ではなく、実践的に把握しているともいい得るであろう。これはいまだ世界の如何なる大学の教壇からも、如何なる硯学の唇からもかつて教えられなかった哲学であり宗教である。……

……米国大学卒業の青年とわが諸大学出身者のいずれが真実の愛国者であり、いずれが真実の国家防衛者であるか、事実は寸毫の違いなくこれを決定するであろう。……

パリ大学は一二五四年の創立にかかり、世界最古の大学の一たる名誉を担っている。しかし如何に歴史は古く、学者は多く、研究の設備は善美を誇ろうとも、その大学の出身者が蹶然として君国の危うきに赴く精神と実力とをもつにあらざれば、かかる大学はあるに甲斐なき存在である。パリ大学の歴史とフランスの現状は多くのことを思わせる。”「決戦下の学徒に与う」、『小泉信三全集』26, pp. 119-120.

1943年9月 卒業式

“私は諸君が君国のために最も劇烈にして困難多きところに挺身して貰いたいと祈るものであります。……劇烈困難且つ危険にして最も信頼すべき人物を必要とする場処があったら其処には慶応義塾の者を当らせて貰いたい。……大学、専門学校、学生、卒業生が今日この危急の日に国家を護ることが出来なければ、斯る大学はある甲斐なき存在である。”(塾長告示、『三田新聞』)

1943年10月?日 発表紙未詳

“今日の学徒はここ数年来俟つあるを期して真にその身心を錬磨し、戦場に赴くの日の一日も早からんことを念願し来ったのだ。……この際政府は聊かの遠慮も要らない、断じて学徒を徴集されたい。学徒は蹶然ペンを銃に代えて戦場に赴き御民われの熾烈な尽忠精神をもって国家の柱石としてその身を鴻毛の軽きに置くであろう。学徒は国家のため大なる命の下るのを待っているのだ。当局は急速且つ徹底的に学徒を徴集し、出来るだけ早く優秀な兵隊を戦線に送り出し皇軍の威力に一層の光輝を添えて貰いたいと思う。戦いに勝利を得ればまた学徒は学問の道に励めばよい。その日が来るまで学徒は一切を捨て戦場に赴くべきである。”(「戦時下文

政の確立望む」、『小泉信三全集』26, p. 121.)

1943年11月10日 『三田新聞』

“「征け、諸君。君国の為めに。父母の墳墓の地を護らん為めに。」……大君の御為めに敵弾を冒せ。大君の御為めに朝夕を厭へ。”「征け諸君」(「学徒出陣」特集)

1944年10月『現代』10月号

“智慧才覚は役に立たぬばかりか、或いは却って邪魔になる。……どんな新兵器があるか、どんな秘密の作戦計画があるか。そんな事は凡べて軍当局者に一任して置けばよい。吾々国民は戦うことあるのみ。”「決心第一、智術第二」、『小泉信三全集』26, p. 102.

このような小泉塾長の徹底した戦争協力の言動は、戦争について懐疑的な学生に対しても強烈な影響力を持ったようである。私のゼミナールが行ったアンケートにも、小泉の指導性を讃える回答が多い。

“小泉塾長の訓示は、実に素晴らしかったと思います。開戦の日、「不幸にして戦争となったが、米英を決して侮ってはならない」「彼らは偉大な文化を有する国民であり、決して多少のことで屈服するようなことはない」と、ご自身の体験を入れて述べておられました”(1944年卒業生)

“「開戦には反対だが、始まったからには勝たねばならぬ」との小泉先生の考えには共感とともに感銘を覚える”(1949年卒業生)

など、50年後も讃辞に満ちていると言ってよい。塾生は小泉の言によって決意を固め、小泉の力によって比較的自由であった塾から戦場へ向かった。

もちろん、

“時局に迎合した言辞・行動をする者を、当時、軍人たちにも増して嫌悪していたので、小泉塾長は最も忌むべき人間だと思っていた。すべてを見通している有数の経済学者が学生を扇動するのは許せない。”(1945年卒業生)

というような厳しい批判もあるが、その数は少い。⁽⁷⁾

5. 小泉の反省と大学の反省

上に紹介したような、塾生道德化——修文練武——先ず強き軍人たれ——肉体的精神的武装——良く生きて良く死ぬ——大学の評価規準は卒業生が真の愛国者・国家防衛者であること——塾員は最も危険な場所へ——断じて学徒を徴集して戦場へ送れ——天皇の御為に——軍を信頼してひたすら戦え——特攻讃美——徹底的の戦勝、という小泉の望みは、無残な敗戦によって崩壊した。天皇は神格を否定され、皇軍は「鬼畜米英」によって解体され、ディモクラシイが万邦無比の国体に代り、日本は平和国家となった。学生の陣頭に立って戦意高揚を叫び続けた小泉塾長は、退任を迫られた

(7) 白井「慶応義塾大学における社会思想研究と太平洋戦争」, p.106.

のである。大火傷によって小泉は入院し、退院後小泉は、学生に対し“吾々は学ばざるがために敗れ、学ばざるがために戦うべからざるに戦いました”という反省の告示を出した（1945年12月1日、「塾生諸君に告ぐ」）。また「私の履歴書」などにおいても、“認識と決断の上で、私は無数の誤ちを犯した⁽⁸⁾”というような文章が散見される。

戦時中の大学は、治安維持法による特高警察の弾圧や盗聴、配属将校や右翼による摘発や監視の中で、国家総動員体制の中で“総力戦”を戦っていたのだから、大学を潰す覚悟がなければ学長の方戦争批判は不可能であった。しかしその状況にあっても思想を貫いて侵略戦争に反対し逮捕された教師は多数いたし、戦争に対し懐疑的態度を取り続けた学長、過度の戦争協力を拒否した教師、自由主義者としての節操を守り続けた教師は更に多い。敗戦後50年を経た今日、このような教師や学生⁽⁹⁾の存在を明らかにすることは極めて重要で、それは戦時中の学者や学生の生き方の隠された多様性を示すものである。

しかし大学という組織全体としては、もちろん受難の時代で抵抗することは極めて困難であり、積極的であれ消極的であれ戦争に協力し、学生や卒業生を次々と戦場に送らねばならなかった。今日ではそのこと自体が反省されている。大学は批判的な精神を涵養する所であるのに、教授も学生も戦争の目的に対する批判や侵略の実態に対する批判をほとんど持たなかったとすれば、それは大学としては自滅を意味する。皇国史観の虚偽にまどわされ、真理の探求や国際情勢の分析など大学が本来やるべき使命を放棄してしまった責任をどう考えるべきか。戦後直ちに大学の戦争責任を痛感して自ら点検整理した大学もあれば、GHQの命令による教員適格審査以外何もやらなかった大学もある。大学の評価は様々な点でないうるが、過去の歴史を正確に調査して、誤りを二度と繰り返さない、そういう決意を持つ、そのための手段を持つ大学が、将来ともに生き残るべき優れた大学であろう。⁽¹⁰⁾

（本稿は1994年12月15日に慶応義塾経済学会が主催した会長講演をもとにしているが、日数がたったので内容をかなり新しくした。）

（名誉教授）

（8）『小泉信三全集』16, p. 496.

（9）たとえば“学業を志した有為の若人たちを過酷な運命にゆだねるほかなかったことに、深い胸の痛みを覚えるのである”「学徒出陣50年にあたって——私立大学総長・学長272人の共同声明——」青山学院大学プロジェクト95・編『青山学院と出陣学徒——戦後50年の反省と軌跡——』発行者雨宮剛、1995.

（10）白井厚「大学——風にそよぐ葦の歴史」、『わだつみのこえ』No. 99, 1994. 11. 20, p. 47.

現在では戦時中の大学の歴史自体がほとんど忘れられているので、経済学部では1995年度に白井が担当し「太平洋戦争と大学」という講座を開講、千種義人名誉教授に戦時中の経済学研究と教育を、神代忠男、松山桂一郎、松尾俊治氏らの先輩に当時の学生生活を講じていただいただけでなく、木村時夫早大名誉教授、塚田理立教大総長、山下肇東大名誉教授、浅野健一同志社大学教授などを招いて、各大学の戦時中の歴史を講義していただいた。塚田総長の講義の一部は1995年12月18日付『朝日新聞』夕刊に紹介されている。